
My World ~ 自分だけの世界 ~

テバサキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

My World ～自分だけの世界～

【Nコード】

N3715Q

【作者名】

テバサキ

【あらすじ】

現在、様々な科学技術の発展により世界的に注目される事になった、

日本。その中で科学技術の結晶と言われているのが、

『My World』。

界墮 京介は、世界で唯一『My World』の使い方を教える学園、『M・Y』の生徒である。学園で起こる様々な事件に巻き込まれていった学生達のSF学園ファンタジーである。

第1章（前書き）

はじめまして、テバサキです。
はじめての投稿となりますので、大変読みにくい作品になっている
かも知れません。
では、どうぞ

第1章

ここは『My World』専門学校、通称『M・Y』である。

この学園は、世界的にブームになっている『My World』の使い方を教え、社会で役立つ『ワールドプレイヤー』を育てている学園である。

『My World』とは、ネットゲームのひとつである。店などで買ったワールドチップと呼ばれる『My World』用のデータカードとサングラスのような形をした『My World』用の特殊なメガネを掛けて行うゲームで、その中身は、ゲーム場のワールドと呼ばれるところに自分の好きな世界を築きあげるといった簡単なゲームである。

とある朝

「はあ」

「ん？ どうした京介？」

「なんだ光樹か いやまた順位が……」

「また最下位なのか？」

「うっうん……」

この学園はテストの結果が張り出され学園の中の順位が書かれているのだ。

「ホントバカだなお前 でもいつもなら気にしないのにどうしたんだ？」

「いや、今回の学年末2年の時にもらえるワールドチップに影響するから……」

「ああ、そうかじゃあこれでお前のワールドチップは最低ランクに

なるのか」

「うるさい 光樹はどうだったんだよ」

「ん？ 俺か？ 俺はなエランクだ」

「僕のひとつ上なだけじゃないか」

「でも、お前の」ランクよりは上だぞ」

うるせえ！と彼らは掲示板の前で殴り合いをやり始めた。

ランクとは、ワールドチップのランクであり、ランクが高いほど性能が高いチップが貰え、最高ランクのAから最低ランクのJまである。ランクは1年の学年末テストで決まり、特別なことが無い事にはそれからランクが変わる事はない。

と、その殴り合いに。

「アンタ達、何やってるのさ」

「鈴菜！ こいつが……」

「はいはい、わかった、わかった、どうせまたくだらない喧嘩でしようにせめて人の邪魔にならない地球外でやりなさい」

「「できるか！」」

この僕の横にいる男は、藤村光樹、体格は野球をやっているせいかがツチリとした体格で、性格はさっきの喧嘩を見てのとおり悪い、僕とは小学校からの親友で結構長い付き合いになる。そしてあの爆弾発言を言ったのは高梨鈴菜、彼女も小学校からの付き合いである、体はスポーツマンっぽい体でそれほど胸は無い。

「ん？ なにか言った？」

「いっついえ何も」

心を読まれたようだった。

「で、鈴菜はどうだったんだよ、テスト」

「私？ 私はね、まあまあかな」

「ランクは？」

「Cランク」

「くそっ」

彼女は俺たちよりかなり頭がいい。

とそこに、

「おら、お前らもうホームルームが始まるぞ」

と先生が竹刀を片手に言った。

この恐ろしい先生は竹内先生、別名破壊神である。

「おい、高梨こいつらを呼んで来いと言ったのに……」

「すっすみません！」

鈴菜は俺達を呼びに来てた見たいだった。

いつの間にかあんなに賑わっていた掲示板の前にはだれもいなかった。

「もうホームルームか」

「お前らも早く来いよ」

「じゃあまたね」

鈴菜と破壊神が校舎に入っていた。

「おれらもそろそろ行くか」

「おお、その前に……」

「ああ、もちろん……」

「さっきの続きだ!」

それから俺らが教室に行ったのは1時間目が終わったあとだった。

第1章（後書き）

まだ途中なので続きます。
いろいろ指摘があったらおねがいします。

第1章 2（前書き）

この前の続きです。
どうぞ

第1章 2

『キーン・コーン・カーン・コーン』と2時間目の終わりを告げるチャイムが鳴った。

しかしチャイムが鳴ったのにシステムデスクの上で京介が寝ていた。すると光樹が、

「おい 起きろバカ授業終わったぞ」

「うつ……うつ」

「お前今日も寝てたな」

「ふあゝあ ちよと寝不足で……」

「京介！ 今日も寝ていたな！」

「あつ！、いつ委員長！」

彼女は、このクラスの委員長で名前は南秋、委員長をやっているだけあって成績は優秀でAランクだ。

「お前また授業寝やがって……、あと光樹！」

「なんだ？」

「1時間目京介と一緒にサボったじゃないか、京介はいつも寝ているから変わらないが……お前はしっかり勉強をして成績を上げてもらはないと困るんだ！」

「むっ、僕はそんな毎日寝てないよ」

「ああ、あれか2年の1学期にやるクラス対抗ワールド戦争の事だろ」

クラス対抗ワールド戦争とは、各クラスごとにクラス全体でワールドを作り、そのワールドの中で他のクラスのワールドと戦争をして勝ったらそのワールドのフィールドを貰い、すべてのクラスのワー

ルドを手に入れたら勝ちと言う、ゲームの事だ、

「そう　うちのクラスはただでさえランクが低いのに、さらに弱くなったなら勝てないでしょう？　だから少しでも成績を上げクラスワ
ールドの性能を上げて貰わないと困るの」

「でも、僕らのクラスにランクの高い人達がいるんだからランクの低い僕らは関係ないんじゃないの？」

「はあ？　何言ってるの？　クラス全体のランクを平均したのがクラスのランクになるのよ」

「えっ！　そうなの？」

「はあゝ京介、お前冬休み前に貰った『2学年の行事』のところに書いてあるクラス対抗戦の説明読んだか？」

「あの分厚い本？」

「そうだ」

「間違っただけじゃなかったかも……」

「はあゝやっぱり」

「あんた達何やってんの？」

とそこに職員室から帰って来た鈴菜がやってきた。

「あつ、鈴菜ちゃん」

「こんにちわ、秋ちゃん　で、何やってんの？」

「京介のバカさ加減を物に例えて話してたところだ」

「ロシアぐらいの大きさじゃない？」

「光樹！？　そんな話してないじゃん、あと鈴菜、ロシアは大きすぎだろ！？」

「鈴菜！　そんな大きさじゃないぞ……」

「光樹、お前はやっぱり親ゆ……」

「地球ぐらいだ」

「おい！　一瞬お前を親友かと思った俺がバカだったよ！」

「はあ？ 俺は一度もお前を親友と思った事など一度もないが」

「何だと！」

「やんのかコラ！」

僕と光樹は胸倉をつかみ合った。そこに、

「あんた達いい加減にしなさい」と言いながら委員長が僕達の首筋を手刀で思いつき叩いた。

「「いつてえ」」

僕達は床にのたれ回りながらいった。

もしこれが僕らのように毎日殴り合いをしていない人が食らったらきつと気絶はしていただろう。

「で、ホントは何の話をしていたの？」

「えつとね、こいつらの成績が悪いからちょっと注意していたの」

「へえーそうなんだでもこいつらの成績はもう遅いわよ」

「知っているけど少しは成績上げて貰わないと困るから……」

「まあね、そろそろクラス対抗戦だからね」

「あんた達そこで倒れていないで少しは勉強しなさい！」

「お前のせいだ」

「そうだ！ どうせこいつら家に帰っても勉強しないんだから勉強会しよう」

「「げ」」

「鈴菜ちゃん いい考えね、じゃあ今日やりましょう」

「ちよつと待ってくれ！ 俺達にも用事が……」

「そつそうだよ！ 用事があるから……」

「「用事って？」」

「「そつそれは……」」

「そんな用事はないんだから、あきらめなさい」

このままでは地獄の放課後になってしまう。
そこに、

「そつそつだm黄島達と約束があるんだ」

「「じゃあ黄島達もいれましょう」「」

「ごめん黄島、お前らも道ずれのようだ。」

第1章 2（後書き）

まだ続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3715q/>

My World ~ 自分だけの世界 ~

2011年1月28日04時15分発行